

学位論文内容

大学の英語リーディング授業に協同学習の理念を取り入れた場合、英語学習への動機づけが高まるとともに学びに対する意識が前向きになり、学習成果に繋がる傾向があるという一定の見解は得られている。大学の英語リーディング授業において目指すべき主体的で深い学びとは、批判的思考力を伴う言語能力の育成にある。そこで、本研究では個々の学習者が「主体的・対話的で深い学び」を行い、テキスト内容を自分なりに理解することを、大学の英語リーディング授業の目的と定め、達成のための学習法の探索、実践、検証を経て、英語教育への提言を行った。「主体的・対話的で深い学び」とは、学習者一人ひとりが自らテキストの問題点を見つけ、他者やテキスト内容と対話して批判的にそこでの主張に向かいあうことである。その目的を達成するための学習法として、「**Learning Through Discussion** 話し合い学習法」を用いた。LTD 話し合い学習法(以下、LTD と略記する)は、理論的な言語能力の育成を目指す学習法で、協同学習の考え方に依拠した読解法、対話法である。協同学習の理念は研究者により多少異なるが、互惠的相互依存、個人の責任、同時進行の相互交流、平等な参加、協同の技能の促進などの理念を本研究ではベースとした。本研究では、協同学習の1つの目標である、個々の学習者の強化、さらに、他者を介して主体的で深い学びの実現の可能性についても検証した。

学習意欲や態度の向上には、学習者の動機づけの関与が高い。学習への意欲や動機づけに関わる理論の自己決定理論では、動機を促進するには自律性、有能性、関係性の欲求を満たす必要があると説いている。日本人学生の欲求が高い有能性、関係性の欲求をうまく使いながら、自律性を高める授業展開を検討した結果、協同学習の理念を根底とした予習の奨励が効果的ではないかと想定した。さらに、学習者の有能性は自己効力感との関連性が高いという背景から、協同学習の効果を自己効力感で測定した。自己効力感とは学習者が直面する課題をうまくできるかという信念の程度を表す概念であり、学習活動を首尾よく開始したり、持続的に維持したりすることに強く関与しているといわれる。協同学習の授業を受講することにより、自己効力感が高まり学習者の動機づけの向上につながる場合もある。また、認知的な面において、学習そのものや記憶を促進することもある。それらの協同学習による効果も検証した。

LTD を取り入れた英語リーディング授業の検証はほぼ皆無に近い。そのため、協同学習理念を用いた大学英語リーディング授業に LTD を導入し、その検証結果をもとに、初年次学習者が予習を自ら行い、授業で主体的に学び、学習内容が定着する指導法を探索した。大学でのその後の学び、また社会人として学び続ける有効な手段として、自ら問題点をみつけ、解決する姿勢を養えると期待できるからだ。本研究では、大学の英語リーディング授業の改善を目的に、協同学習の理念と LTD の可能性を、学習者の学習意欲や態度、英語力に与える影響から、協同認識、英語自己効力感、学習定着、批判的思考、学習者の変容の側面から検証した。

第1章では、序論として、本研究の目的を提示する。現代の日本の教育方針に転換をもたらしたアクティブ・ラーニングをはじめ、学習者に視点を置いた理論や指導法を概観し、語学教育にもたらす影響とともにそれらが内包する課題に触れ、本研究に至った背景と研究の目的について述べた。

第2章では、本研究の鍵となる用語の概念を、協同学習、英語教育、自己効力感を中心に整理し、協

同学習の先行研究が大学英語リーディング授業にもたらす有効性と課題を示した。

第3章では、大学英語リーディング授業改善の解決策として掲げるLTDについて詳述し、協同学習の理念と絡めながらLTDの有効性について論じた。その後LTDを導入する上での研究課題を示した。

第4章では、実践研究1として、LTDを導入した実践授業を詳述した。本研究がLTDを大学英語リーディング授業に導入する探索的研究であったため、LTDはどの英語レベルの学生でも実践可能かをLTDの予習の完成率で確認した。検証の結果、予習が必須となるLTDを実施するには、ある程度の英語力が備わっていないと、実践が厳しいことが判明した。一方、中・上級レベルの学習者には、LTDを使用し他者と共に話し合いながら、少し困難な課題に取り組むことで遂行行動の達成感を得て、英語自己効力感が上昇し、学習意欲を喚起させることが確認された。さらに、人の役にたつ嬉しさや、自主的に課題に取り込む力がついたという態度面でもLTDに対する肯定的な反応が多かった。また、LTDの一連のステップが学習者に批判的に課題文と向き合うことも可能にした。しかし、日本語を課題文として想定している基本のLTDプランを英語の課題文で実施することには、問題点が多々あることも浮上した。

第5章では、実践研究1で得た結果から、修正されたLTDの導入方法を、LTD体験者で検証することにより、大学英語リーディング授業へのLTDの効果的な導入方法を再検証した。その結果、1年間のLTDでの英語のリーディング授業は、上級レベルの英語学習者に、総じて肯定的な効果をもたらすことが確認された。向上した点は、英語自己効力感、ディスカッションイメージの活動性、親和性、重大性とディスカッションのスキルの他者への配慮と理解、雰囲気づくりであった。批判的思考の醸成も確認できた。さらに、英語の授業に関する肯定的な意識も1年間で上昇し、予習時間にも効果が上がった。LTDを1年間体験し、認知面のみならず、人との関わりから得た、他者への思いやり、学習に向かう姿勢や学び方を習得し、態度面で肯定的な変容をした学生も確認できた。しかしながら、LTDがもたらす肯定的な結果は、LTDの効果が要因かまたは協同学習理念が要因であるかの課題が浮上した。

第6章では、LTD群と統制群を用いて実践研究3を実施した。協同学習理念を両群ともに同様に導入し、唯一LTDを使用した予習と話し合いだけを相違点として実施した。その結果、LTD群と統制群共に英語自己効力感、協同効用、ディスカッションイメージにおける活動性および親和性など様々な協同的な話し合いの側面が向上し、会話と小グループに対する不安は減少したことを確認できた。認知面においても、課題文の理解度が回を進むごとく向上した。学習の定着面では顕著な効果を認められなかったが、英語学習に関する意識の向上は確認された。一方、統制群よりもLTD群のほうが上回った点は、話し合いのスキル、他者への配慮と理解、予習時間であった。さらに、LTD群の学生が予習に大きな意義を抱き、課題に対する興味・関心が高いことが確認された。その背景にはLTDの関連付けが大きく関与していることが把握できた。

第7章では、全実践研究から得た結果の考察をまとめ、全体的な考察を行った。

第8章では、終章として、本研究の検証結果を基に大学英語リーディング学習への提言を示し、今後の課題を提示して本論文の結論とした。

最後に、調査、実践授業、LTD導入、LTD予習、教材、テストなど、本研究に用いた各種関連資料を参照のために付加した。